

# 豊 竹英大夫



「訪問」  
「鑑賞」を  
「鑑賞」を

今年の文楽夏公演で「夫婦善哉」(原作・織田作之助、脚色・石浜恒夫、演出・竹本浩三)が出た。初演が十年ほど前で、今回は四度目。一時間ほどの中幕を語ったが、私にとり「夫婦善哉」は初体験。太平洋戦争前後の大阪庶民情緒たっぷりの芝居なので、台詞にえらい気を遣いました。幸い、育ちが大阪の住吉区浜口町なもんで、昭和三十年頃の近所のおっさんおばはんらの使うコトバや仕事を思い出して、語りの参考にさせてもらった。今夏、この、夜七時開演の文楽ナイトショ

ーが異様に盛り上がったのだ。演出と脚本を大幅に変えたことも起因したのか、毎芝居、不入りが続いている夜の部の客席が、沸きに沸いた。千秋楽になるにつれ、客足が伸びたのだから、ビックリ。キャバの狭い東京の国立小劇場なら連日、満員札止めの状況だ。

ところで、私は義太夫教室を梅田と難波で開いていて、一般の人に義太夫節のもつ基本的健康的な発声を教えているが、最近、団塊の世代の受講生が意外と増えてきた。その中のひとりがこの夏、「夫婦善哉」を観にきた折、休憩時にトイレに行ったら、男子トイレの入口の外にまで列ができていた。「文楽にきて、こんな、初めてですわ。しかも平日の夜でっせ！」と目を輝かせて報告。

そしてそれを聞いたもうひとりの受講生は、「夫婦善哉、見に行ったら、あまりにおもしろかったんで、ええ機会や思て主人に声かけたら、一緒に行ってくれましてん。結局二回、観に行きましたが、主人も喜んでくれたのでホンマ、嬉しかったですわ」とのこと。芝居の入りはリピーターで決まると、つくづく思わされた。

このように、今年の夏公演では、団塊の世代の、特に男性の姿が目立ちました。これを

ただひと夏の事件として終わらせないよう、芝居を創る側は鋭意工夫を重ねていくべきだが、観る側の特に団塊の世代の方たちも、世界遺産を「訪問」するだけでなく、「鑑賞」し、楽しみにきていただきたいものです。

団塊の世代といえは、高校の同窓生が先日、私の舞台を義理で観に来た折のこと。ちょうどその日、彼の娘がフランス人の婚約者を家に連れてきていた。出がけに「文楽に行く」旨、告げたところ、婚約者の目の色が変わった。娘を通じて「父の友人が文楽の大夫」であることを理解するや、そのフランス人男性から凄いらすべクトの言葉がかえってきたという。「林(私の本名)のおかげで、家内や娘に一矢を報いることができた！」と、同窓生にえらい喜ばれました。

(文楽大夫)

